

私の研究



ミライにつながる自然体験活動の可能性 ～子ども×自然×保育＝生きるよろこび？～

庄子 佳吾 (しょうじ けいご)

桜の聖母短期大学生生活科学科
福祉こども専攻こども保育コース
講師



1. はじめに

“なんのために 生まれて なにをして 生きるのか こたえられないなんて そんなのは いやだ!”

誰もが一度は耳にしたことがあるアンパンマンの主題歌「アンパンマンマーチ」の歌詞です。非常に難しい問いであり、人が生きていく上で問い続けるものかもしれません。私は、自身の専門分野である青少年教育や野外教育、これらをブレークダウンした自然保育が、この問いの「解」を導くための道しるべのひとつになると考えています。

(1) 青少年教育とはなにか

そもそも「青少年教育」とはどのような教育を指すのでしょうか。それを考える上では、対象となる「青少年」とは何かを一定程度定義する必要があります。

内閣府の『子供・若者白書』にある各種法令等

による青少年の年齢区分によれば、概ね18～35歳未満の者がそれにあたります。中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」では、乳幼児期から概ね30歳未満の者を対象としており、本稿における「青少年」の定義並びに私の専門分野の対象もこれに準拠しています。

そして、青少年教育とは元来、青少年に対する総合的な人間形成を目的に学校以外の場所で行われる教育として、社会教育の一領域として位置付けられ、主に自然体験をはじめとした各種体験活動を中心とした学習展開がなされてきました。昨今では、社会的に困難を有する青少年を対象としたアプローチだけでなく、全ての青少年を対象とした教育機会の創出を目指し、学校教育と連携した取り組みがなされています。

(2) 野外教育とはなにか

続いて、「野外教育」とはどのような教育を指

すのでしょうか。野外教育は国内外を問わず、非常に広範な概念を指しており、様々な定義があります。日本では、文部科学省の「青少年の野外教育の充実について」にて、「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」とあります。よって、野外教育は、自然体験活動を取り扱う教育領域であり、前述した青少年教育における体験活動と関係していると考えられます。そして、野外教育では対象や活動内容、実施主体によって多様な目標がありますが、いずれにせよ五感など直接的な体験学習過程を経た学びであることは共通しています。こと青少年を対象にしたものであれば、青少年の「生きる力」¹⁾を育むために有効な手立てであると定義されています。

(3) 自然保育とはなにか

これまで見てきたように、青少年教育と野外教育は関連した教育領域といえます。それでは、これらをブレイクダウンした「自然保育」とはどのような保育（教育）を指すのでしょうか。

自然保育とは、自然環境や地域資源を活用し、乳幼児の直接的な体験活動を積極的に取り入れた

保育を指します。前述したように、青少年教育、野外教育といった領域が存在しているにもかかわらず、なぜ保育に限定している領域があるのでしょうか。これには、OECD（経済協力開発機構）が“Starting Strong（人生の始まりこそ力強く）”として発表している保育白書²⁾やノーベル経済学賞を受賞したヘックマン³⁾の“幼少期における教育への投資は経済効果が高い”といった報告などを受け、世界的に乳幼児教育・保育が注目されていることが背景として挙げられます。また、日本の保育では従来、自然環境との関わりを重視しており、2017年の保育に関わる幼稚園教育要領、保育所保育指針などの3法令改訂において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に「自然との関わり・生命尊重」として関連内容が明記されるなど再評価されていることから、新たな時代に求められる教育として提起されています。

以上を総合すると、私の専門分野は図表1のようなイメージとなり、現在は保育者養成校において、これらを活かした教育研究活動を行っています。

図表1 私の専門分野（イメージ図）



2. 子どもの体験活動の現状

私の専門分野の紹介にもありますが、子どもの自然体験活動は「生きる力」を育むのに有効であるとされていたり、文部科学省の第3期教育振興基本計画でも「子供たちが達成感や成功体験を得たり、課題に立ち向かう姿勢を身に付けたりすることができるよう、様々な体験活動の充実を図る」等に重要性が明示されていたりしています。これらの背景には、往々にして「今の子どもには自然体験、生活体験などの様々な体験が不足している」という指摘がみられます。果たして、本当に子どもの自然体験や体験活動は不足しているのでしょうか。

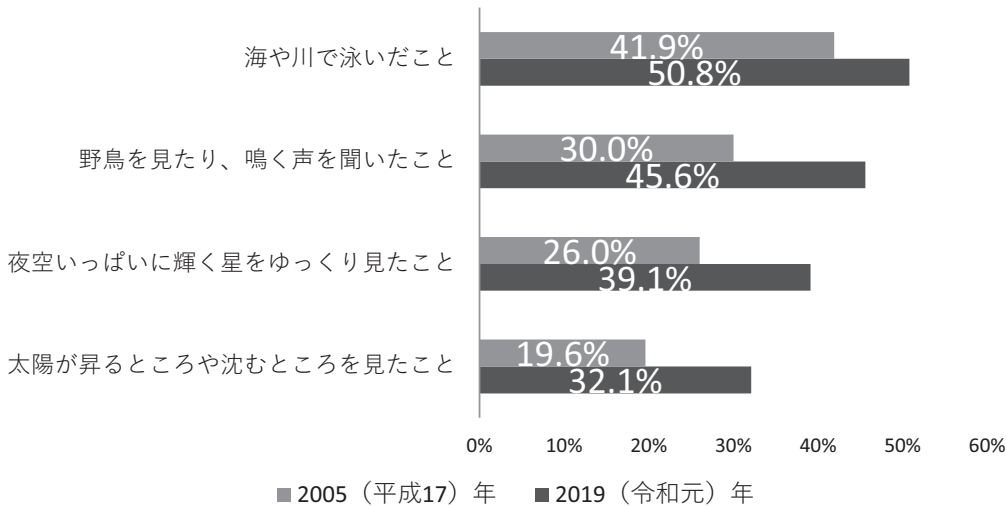
国立青少年教育振興機構の「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）」（2021）によると、2005（平成17）年から2019（令和元）年にかけて子どもの体験活動は増加傾向が示されています。たとえば自然体験では「海や川で泳いだこと」が「何度もある」と回答した子どもは、41.9%から50.8%、「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」では30.0%から45.6%、「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」では26.0%から39.1%、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」

では19.6%から32.1%に増加していることが明らかになっています（図表2）。同調査では、他にも子どもの生活習慣やお手伝い、家族との関わりなどについて調査しており、減少傾向がみられる項目もあるものの、2005年から2019年にかけて、全体としては概ね増加傾向にあることが明らかになっています。よって、これらを見る限りでは、子どもの自然体験や体験活動は増加傾向にあるといえます。

一方で、全国の学生・社会人を対象に「早寝早起き朝ごはん」全国協議会が2021年に実施した「『早寝早起き朝ごはん』の効果に関する調査研究」を再分析した結果をみると、子どもの頃の自然体験は年代が若くなるほど少なくなっている傾向が示されています（図表3）。図表の縦軸は上から50代以上、40代、30代、20代以下の年齢区分に、横軸は自然体験が多い群、中程度の群、少ない群という3つのグループに分けています。同調査の再分析結果として、他に、友達との遊び、地域での活動、動植物とのかかわりといったカテゴリがありますが、概ね同様の傾向がみられています。

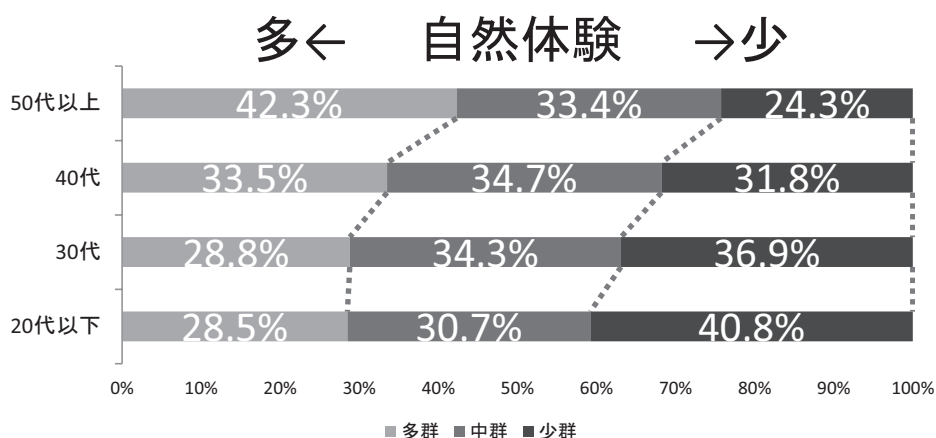
これらの結果を総合すれば、子どもの体験は社

図表2 子どもの自然体験の経年比較



出典：国立青少年教育振興機構（2021）「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）」より筆者作成

図表3 年代別にみた子どもの頃の自然体験の多寡



出典：「早寝早起き朝ごはん」全国協議会（2021）『「早寝早起き朝ごはん」の効果に関する調査研究』より筆者作成

会の変化に合わせて多様化し、体験の「量」は増えているものの、「自然の中で友達と遊び込む」といった「質」が低下していることが「今の子どもは体験不足」といわれている所以と考えられるのではないのでしょうか。

3. 子どもの自然体験活動を支える保育者養成

「自然体験の重要性」が主張されるということは、一昔前は「あたりまえ」だった近所の自然の中で伸び伸びと遊ぶこと、友達と「遊び込む」ことの大切さが見直されたともいえます。国土緑化推進機構⁴⁾は、幼児期の自然体験活動は「生きる力」を育むのに適しており、そこには「心動かされるような体験」と「挑戦的な活動」ができる環境が必要と指摘しています。

前述にもありますが、なぜ自然体験が「生きる力」を育むのでしょうか。それは五感などを通して直接体験をすることによって、失敗や成功を繰り返したり、人工物では感じられない自然の不思議を感じ取ったり、命にふれる機会が豊富にあるからです。このような体験は、子どもたちの、頑張る、諦めない、粘り強い、好奇心があるなど「心の動き」に関わる力を育みます。これらは目に見

えない力「非認知能力」とも呼ばれ、AIなどによる社会変革が大きく進展している社会において求められている力ともいえます。特に、乳幼児期は子どもの発達の個人差、体験の違いが大きく、運動機能・知的機能、対人関係も著しい成長を遂げる時期になっています。感性の成長が著しい幼児期に自然体験をはじめとした様々な原体験を得ることは、豊かな人間性・社会性を育む上で大切な基盤となることが明らかになっていることから、子どもの体験を支える保育者の役割はより一層重要なものと考えられるでしょう。しかしながら、実際には「若い保育者や保育者を志望する学生において、自身の生活体験や自然体験が不十分なことが保育現場への自然体験活動普及の妨げになっている」といった指摘もあり、その^{かんげき}間隙を埋める教育が従来よりも求められているといえます。

では、保育者養成段階で取り組むべき支援の在り方とはどのようなものなのでしょうか。私が実施した研究⁵⁾では、保育者養成校の学生の体験活動の実態において、自然体験をはじめとする量的な面での不足はみられなかったものの、種類や内容といった質的な面が不足していると考えられました。また、幼児にとっての体験や遊びに対し

て、学生は特に「体験や遊びの教育的意義」や「戸外遊びや自然体験による育ち」に注目していることが分かりました。よって、保育者養成校の学生には一定の体験の素地があることを認識した上で、直接体験を通して体験活動の意義や知識、基本的な指導技術を学ぶことが有効であると考え、フィールドワークなどを積極的に取り入れた教育実践を行っています。

4. おわりに

ユニセフ・イノチェンティ研究所⁶⁾が先進国の子どもを対象に実施した調査において、日本の子どもの幸福度は身体的健康が1位でありながら、精神的幸福度は37位という最下位に近い結果でした。日本のデータはないものの、同調査では「より多く外で遊ぶ子どもの方がより幸せである」という結果も示されており、外遊びの機会は子どもの幸福度に関係することが明らかになっています。さらに、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、子どもたちを取り巻く環境や体験は急激に変化、心身に大きな影響をもたらしています。このような状況下だからこそ、私はすべての子どもたちに豊かな自然体験活動の機会を創出し、“生きるよろこび”を感じられる社会の実現を目指していきたいと思っています。

引用文献・注

- 1) 「生きる力」とは「自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、より良く問題を解決する能力」「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」とされている（文部省編（1996）21世紀を展望した我が国の教育の在り方について・中央教育審議会第1次答申。ぎょうせい。20-21.）。
- 2) OECD（2017）*Starting Strong V.*
<http://www.oecd.org/publications/starting-strong-v-9789264276253-en.htm>
- 3) ヘックマン, J. (2015) 幼児教育の経済学（古草秀子訳）。東洋経済新報社。（Heckman, J. J. (2013) *Giving Kids a Fair Chance*. Cambridge MA: The MIT Press.）
- 4) 国土緑化推進機構（2018）森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック。風鳴舎。
- 5) 庄子佳吾・及川未希生（2020）保育者養成校における学生の体験活動に関する一考察：体験活動の実態と計量テキスト分析からの検討。盛岡大学短期大学部紀要, 31（44）, 55-69.
- 6) Gromada, A. & Rees, G. & Chzhen, Y. (2020) *Worlds of Influence: Understanding What Shapes Child Well-being in Rich Countries*, Innocenti Report Card No.16, UNICEF Office of Research - Innocenti, Florence.

<プロフィール>

1989年宮城県仙台市生まれ。2011年千葉大学教育学部生涯教育課程卒業、2018年東北大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻博士前期課程修了。

2011年独立行政法人国立青少年教育振興機構専任職員、2019年愛知文教女子短期大学助教、2020年同講師等を経て、2021年4月より現職。

専門分野は青少年教育、野外教育、自然保育。

これまでに、宮城県栗原市立花山小学校協働教育推進委員会委員、「早寝早起き朝ごはん」全国協議会「早寝早起き朝ごはん」の効果に関する調査研究会委員などを歴任。現在、福島県子ども里山・自然保育活動推進検討会委員、大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを利用した主体的学びの促進」運営評議会幹事、日本自然保育学会特任理事など。